

定期テストと実力テスト

2学期になって、9月に実力テスト、10月に中間テストがありました。

よく「定期テストは得意だけれど、実力テストは苦手」という塾生がいます。こうした生徒は往々にして「まじめな」生徒で、範囲が厳密に“決まっている”テストには短期集中で勉強することができるようです。

厳密に言えば9月の実力テストは夏休みの課題テストの色合いが強い場合もあり、本当の意味で「習ったこと全範囲」という「実力」を評価するテストになっていない場合もありますが、その場合は8月末の愛知全県模試で判断することができます。

勉強する内容は同じなのですから、定期テストの勉強を積み重ねることで自然と実力がついてくると考えがちですが、現実には「定期テストには、範囲表が出てからの1週間足らずで、出るところだけをひたすら詰め込み、実力テストは何もせず“実力”で受ける」生徒が多いように思います。

もちろん高校入試は中学全範囲から出題される「実力テスト」です。ただ、受験勉強を何もせずに受けるという受験生にはそれ相当の結果が待っているわけで、やはり定期テストとは違う取り組み方をしなければならないのです。

テストの傾向を調べ、自分の弱点を把握し、強化する。とにかく長丁場の計画をたて、着実に実践する根気が必要となってきます。塾はそれに対して、適切な時期に適切な指導を与え、試験までに間に合うようにアドバイスをすることになります。定期テストを毎回“泥縄方式”で立ち回っている生徒には、受験勉強はやはり“苦手”なのでしょう。

今回こんなことを思ったのは、日本シリーズで阪神がロッテに4連敗したことがきっかけでした。ちょうど逆のケースになりますが、阪神（岡田監督）はペナントレースという長丁場の戦い方においては今年大成功を収めたと言えます。しかし日本シリーズという短期決戦における戦い方でチームの実力を発揮することができませんでした。

その原因として、優勝後1ヶ月近く実戦から遠ざかっていたからとか、プレーオフの勢いをシリーズにもちこまれたとか言う人もいるでしょうが、それらはすべて言い訳でしかありません。それは始めからわかっていたことであり、むしろその時間的な余裕をプラスに生かせず、「ペナントレースのように」戦おうとしたことが敗因といえるかもしれません。少なくとも今年は交流戦もあり、そのときにはほぼ互角に戦っていたわけですから、「短期決戦を戦う術が未熟であった」と総括できると思います。

話は戻りますが、適切な勉強法というのは確かに存在し、それは何を目標にしたものかによって変わってくるわけです。自分自身の勉強法を見直し、適切な指導を受けることが成功への鍵となります。

「すこしのことに、先達（指導者）はあらまほしきことなり。」（徒然草 第52段）